

縄文女子 の 妄想トーク

今回の妄想トークのメンバーは…



20年前から北海道の縄文PRに力を注ぐ、縄文沼の女神様



縄文人の技に感動し、縄文愛に目覚め、現在布教(普及)活動中 No BEER No LIFE !!



縄文とカエルをこよなく愛し、オリジナルグッズ販売やイベント主催などで大活躍



縄文大好きな2児の母 身近なところに縄文を見つけては日々親子で楽しんでいる

今回はオマケ要員として、ちよいちよいい発言します!

オマケのドニワ女子



ストーンサークルにまつわる縄文人の出会い・恋愛・子づくり事情

<ストーンサークルは出会いの場?>

縄文時代の後期に出現したストーンサークルは、あちこちの集落から集まって共同で祀りを執り行う場所だったみたいね。祀りって実際に何をやってたのかしら?

せっかく遠くから集まるんだったら、お祈りだけでなく、情報交換や交流の場だったはず。きっと男女の出会いの場でもあったんじゃない?

きゃー!「街コン」ならぬ「ムラコン」ってこと? 「あの人かっこいい!」とか、「おっ! 去年のあの子、きれいになったなあ…」とかヒソヒソ話したりして。

祀りは特別な日。テンションも高まって恋が芽生えちゃう可能性もあるわよね。今の時代だって、お祭りや花火大会の日にカップル成立とかよくあるし。

他の子より目立つようにおしゃれしていったりして? 人と違うアクセサリをつけたり、髪形も凝ってみたり。それで縄文時代のアクセサリの技術がアップしてたんだったりして(笑)。

案外あるんじゃない? モテにける情熱を作品に昇華!

祀りの日が近づいてきたらみんなソワソワしちゃってね。お母さんに「もう準備できてるの? あーほら、貝玉までできてないじゃない! もーあんたはいっつもギリギリまでやらないんだから!!」とか言われたりして。

もはや夏休みの宿題状態…(笑)

ちなみにその時はどんな人が人気だったのかしらね?

宴会の場で選ぶとしたら、歌声が心に沁みるとか、踊りがカッコいいとか。隣同士に座って気があったとか…。

私は断然ムキムキマッチョの人を狙っちゃう! 生命力も生活力もありそう。

狩りで獲物をしとめるとテンションもあがって特別なフェロモンがでるんだって。そんな「におい」もモテ要素の一つだったのかも。

例えば真暗な場所でも「好きなにおい」で判断って、なんか官能的で素敵ね!

明るくなってびっくり! ガッカリ! みたいなことも…

あったかもね~!!! (笑)

<出産・子育て>

縄文時代にも、経験上、小さなムラの中だけで結ばれていくと、死産とか、奇形や障害を持った子が生まれやすくなって、良くないらしいっていうのはわかってたんじゃないかしら。そういう意味で他の地域の人との交わりはとっても大事だったと思うの。

じゃあストーンサークルでの「ムラコン」は、外部の血を入れるという意味で、重要な目的を持つ行事になるわね。

例えば夏至のあたり6月頃に祀りで交流があったとしたら、大体10か月後の4月くらいに子供が産まれるって感じね。夏至を基準にすると、寒い季節を避けて出産できるし、あたたかくなって食料も豊富になり始める春にムラのみんなで協力して子育てができて合理的なのかも。

そっかー! だから夏至の太陽を目印にするようなストーンサークルが多いのかな。すごい!

同じくらいの時期に一齐に出産したとしたら、たくさんおっぱいが出るお母さんは赤ちゃんに授乳して、おっぱい出ないお母さんは、子供のお世話をしたりごはんを作ったり。もしも産後体調がなかなか戻らなくても、みんなに任せ安心してゆっくり休めるよね。

産んだお母さん一人に子育ての責任を押し付けるんじゃなくて、ムラがひとつの家族として、協力して子供を育てていったのかもしれないね。

それは子供にもお母さんにも優しい世界! 現代でも見習いたいシステムかも。

死産や、病気、ケガなどで早くに命を落とす子供たちも多かっただろうから、

ムラの存続のためにもたくさんの子供を産んで、みんな元気に育つように、とにかく必死だったんじゃないかしら。

今でも出産子育ては命がけ! 私は出産のとき本当に大変だったから、医療も発達していない縄文時代には、どんなに不安で大変だったかって考えただけで涙出そう…。せめてムラの共同子育ての仕組みのおかげで、お母さんの不安や負担が少しでも和らいでいたならいいな。

ほんとにそうね…。

<ストーンサークルの役割>

ストーンサークルの下や周辺からはお墓が出土することもあるの。この場所で縄文人は祈り、出会う。そこにどんな意味があったのかしら。

祖先が眠る場所で男女が会って、その命を次に繋げていく。

大自然に抱かれながら新しい命を授かる。

祖先と自然は、縄文人にとって最も感謝とリスペクトの気持ちをもつ存在なんだろうね。遠くからわざわざ重たい石を山の上に運んで、何年もかけてストーンサークルを作る。それだけの労力をかける価値のあるとても大事な場所だったのね。

「死」というものが今よりもっと身近にある毎日のなかで、人の力の及ばない大きな存在を近くに感じながら、縄文人は生きていたのかな。

命の終わりと新たな誕生…。命の循環を象徴しているからサークルなのかも。ストーンサークルは想像以上に深い意味がある場所だったようね。

(次回につづく)

★【縄文女子の妄想トーク】は、縄文をこよなく愛する縄文女子たちの個人の主観に基づく妄想トークがメインになっています。学術的に正しいかどうかは置いておいて、素人目線の「こうだったのかな」「こうだったらいいな」という妄想ワールドを、どうか生暖かい目で楽しんでいただけたら嬉しいです。